

# 居住環境の採光性能に関する合理的な評価法の開発

(研究期間：令和4年度～令和8年度)

建築研究部 設備基準研究室  
住宅研究部

室長  
(博士(工学))  
建築環境新技術研究官  
(博士(工学))

山口 秀樹  
三木 保弘

主任研究官  
(PhD)

平川 侑



(キーワード) 住宅性能表示制度、採光、快適性、居住者評価

## 3.

快適で安心な暮らしを支える研究

### 1. はじめに

住宅の品質に関する評価制度の1つとして、「住宅の品質確保の促進等に関する法律」に基づいた住宅性能表示制度がある。この制度において光・視環境性能の評価項目は、窓からの採光に関するものとして単純開口率や方位別開口比を表示することとしているが、これらの数値と光・視環境性能との関連が居住者にはわかりにくく、設計の目標値となる等級分類への対応も十分にはできていない。本研究は、近年多様化するニーズ等を踏まえた光・視環境の性能評価方法を改善することを目的とし、本報告では、まず窓および窓から得られる光・視環境に関する居住者の評価について調査した結果を解説する。

### 2. 住宅の採光・眺望等に関するアンケート調査

調査方法はWeb上で回答するインターネット調査で、2023年1月に実施した。調査対象地域は年間日照時間や日の出入り時刻が異なる3エリア（東北：秋田県・山形県、関東：千葉県・茨城県、九州：熊本県・鹿児島県）とした（回答者は予備調査10,000名から年代や性別で割りつけた1,000名）。主な調査項目は、居室の大きさや窓の大きさといった「室・窓の仕様」に関する項目、屋外の空間のゆとりや空の見える程度といった「外部状況」に関する項目、窓からの採光や景色の満足度といった「光・視環境の評価」に関する項目とした。

アンケート項目のうち、採光に関わる「自然光がよく入ってくる」を5段階で評価（5:そう思う、3:どちらでもない、1:そう思わない）した結果と、窓の大きさとの関係を図に示す。窓の大きさの指標とし

て、開口率（窓面積と室床面積の比）と、窓面積とした場合で図示しているが、窓面積を用いたほうが、採光の程度をよく説明できている。また窓から空が見える程度が良いほど（数値が大きい）、採光の評価が高くなること、またその影響の程度を確認することができた。

### 3. 今後の展開

住宅性能表示制度において、採光の評価に加えて眺望性の影響も併せて検討し、多様なニーズに対応した光・視環境評価法の改善を図る予定である。

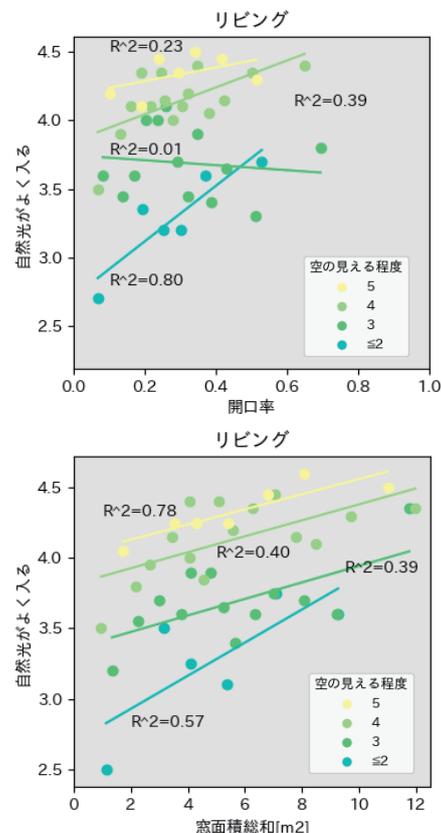


図 開口率および窓面積と採光評価の関係